

第6節

子育て意識

5年前の調査と比較し、育児への負担感によるイライラ感情を子どもにぶつけてしまう母親が減少しているが、育児への不安感は増加傾向にあった。また、育児への肯定的な感情も増加傾向にあった。子どもの年齢が0～2歳クラス児である場合には、保育園児より未就園児をもつ母親のほうが育児への否定的な感情が強く、3～5歳クラス児の場合には、保育園児より幼稚園児をもつ母親のほうが否定的な感情が強かった。

00年の調査結果より、母親は、子どもをかわいと思う一方で、時にはわずらわしさなどの否定的な感情を持っていることが明らかになった。ここでも母親による回答のみを分析の対象とし、5年の間にこうした母親の感情に変化がみられたのかを検証する。

● 育児への不安感は増加傾向に

図2-6-1に示したのは、母親の子育て意識に関する項目の5年間の比較結果である。育児への否定的な感情を示す5項目のうち、「子どもがわずらわしくていららしてしまうこと」「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」では、5年前と比較しあまり変化がみられなかったが、「子どもに八つ当たりしたくなること」は、わずかながら減少傾向にあることがわかる。これらはいずれも、育児への負担超過によるイライラ感情とも呼べるであろうが、こうした感情を子どもにぶつけてしまうことは、5年前よりも減っているようだ。しかし、「子どもに八つ当たりしたくなること」以外の2項目であまり変化がみられないように、育児への負担そのものが軽くなったというわけではない。

また、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」「子どものことでど

うしたらよいか分からなくなること」という育児への不安感は増加傾向にある。とくに「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」について「ある」（「よくある」＋「ときどきある」割合、以下同様）と答えた母親は、00年よりも6.4ポイントも増えている。

育児への肯定的な感情に関する項目については、全体的に「ある」という回答が増加している。とくに「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」と答えた母親は、全体の9割以上にのぼり、00年と同様高い割合を示す結果となった。しかし「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」については、「ある」と答えた割合が、00年よりも4.1ポイント減少している。全体的に子育てを肯定的にとらえる母親が増えている一方で、先ほども述べたとおり、育児への不安感は強まる傾向にある。子どもはかわいいが、どこか育児に自信が持てないというような不安を抱える母親が増加している。少子化社会を反映し、「子どもを良く育てなければいけない」「子育てに失敗できない」など、母親にとって育児へのプレッシャーが強まっていることが考えられる。つづいて、子どもの年齢や就園状況によって、母親の子育て意識に違いがみられるかどうかを分析する。

● 0～2歳クラス児の子どもをもつ 母親の子育て意識

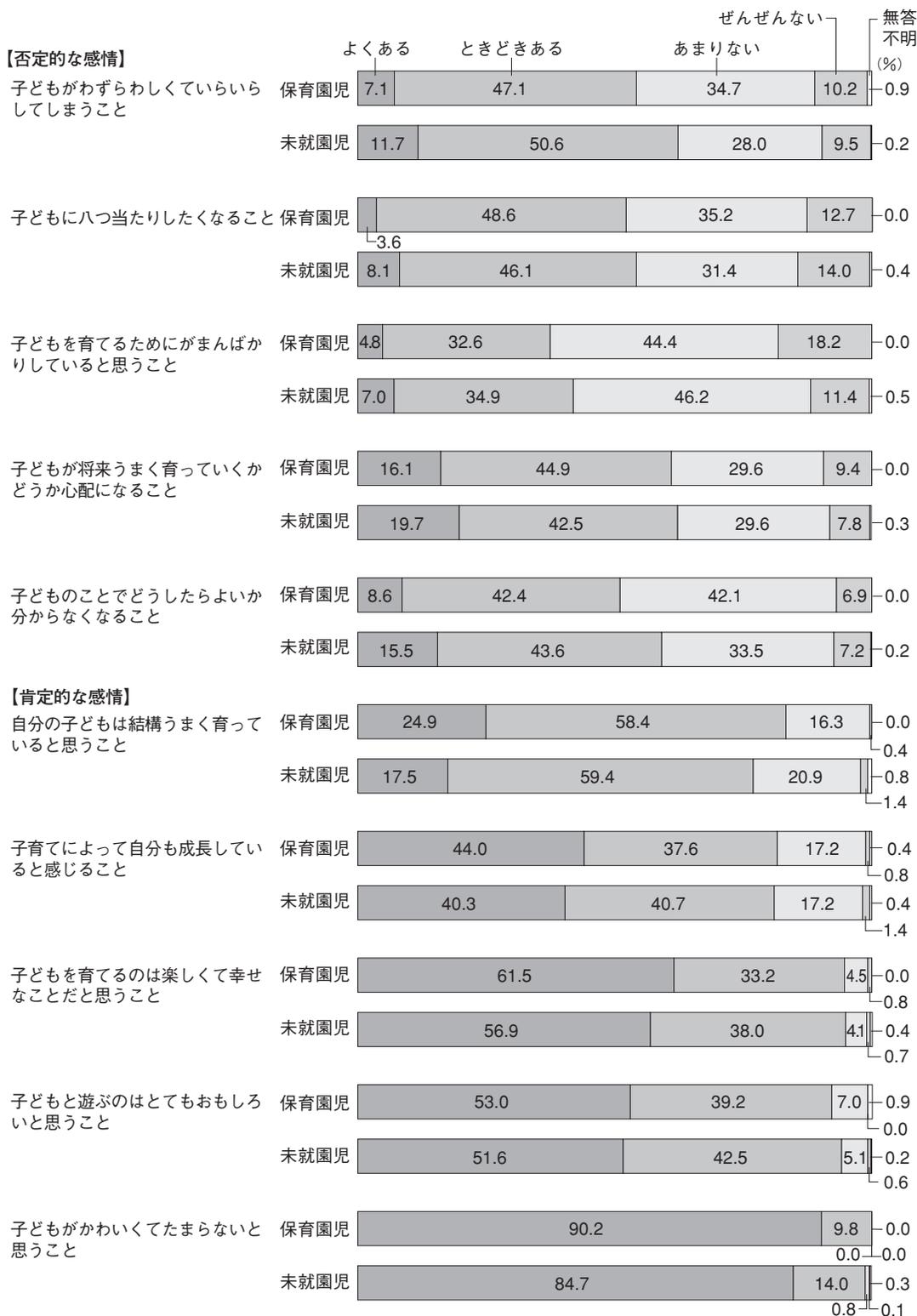
図2-6-2は、0～2歳クラス児の子どもをもつ母親の子育て意識について、就園状況との関連を示したものである。ここでは、保育園児をもつ母親と未就園児をもつ母親との比較を行った。

まず、育児への否定的な感情について、両群の回答（「よくある」＋「ときどきある」割合）を比べると、すべての項目では未就園児の母親のほうが高く、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」で8.1ポイント、「子どもに八つ当たりしたくなること」で2.0ポイント、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」で4.5ポイント、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」で1.2ポイント、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」で8.1ポイントの差があった。

一方、育児への肯定的な感情については、未就園児より保育園児の母親のほうが高い割合を示すのは、「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」（6.4ポイント）のみで、他の項目ではほとんど差がなかった。ただし、「よくある」という回答のみを比較すると、「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」では7.4ポイント、「子育てによって自分も成長していると感じること」で3.7ポイントの差がみられ、保育園児の母親のほうがより強くこうした感情を持っていることがわかった。

以上のことから、未就園児をもつ母親と保育園児をもつ母親とでは、育児への肯定的な感情に大きな差はないが、否定的な感情は未就園児の母親のほうが高いことがわかった。このように否定的な感情に差があったのは、日中子どもを保育園に預けているか、もしくはおもに母親自身で子どもの面倒をみているかどうかといった、母親の育児への負担度の違いによるものと考えられる。

■図2-6-2 子育て意識（0～2歳クラス児 就園状況別 05年）



注) 母親の回答のみ分析。

(サンプル数 保育園児200人、未就園児1066人)

● 3～5歳クラス児の子どもをもつ 母親の子育て意識

つづいて、3～5歳クラス児の子どもをもつ母親の子育て意識に関し、就園状況別に比較を行ったのが、図2-6-3である。

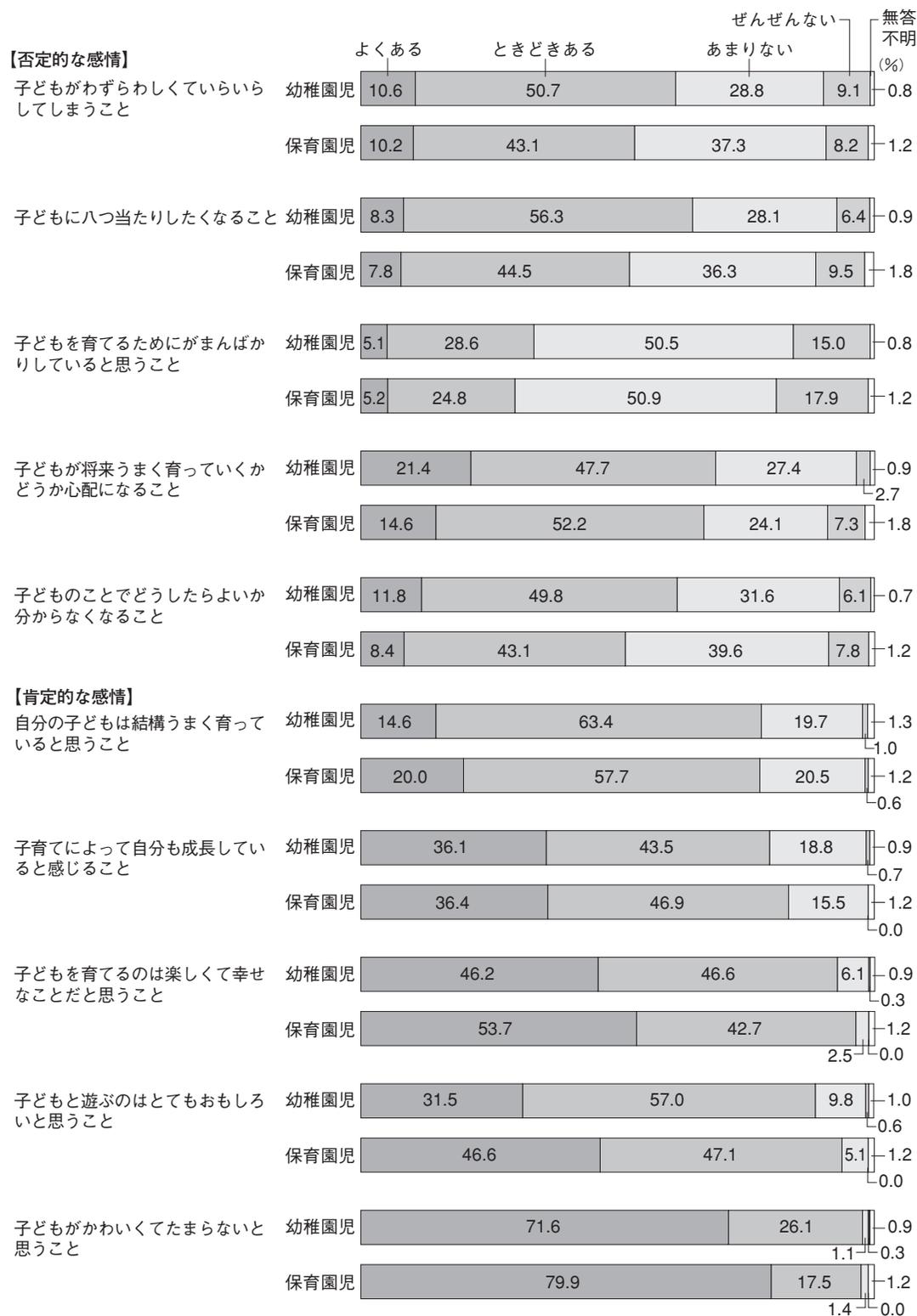
子育てに関する否定的な感情について「よくある」+「ときどきある」と答えた割合は、全体的に幼稚園児の母親のほうが高い。とくに「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」では8.0ポイント、「子どもに八つ当たりしたくなること」では12.3ポイントの差がある。またこうした育児への負担感のみならず、育児への不安感も幼稚園児の母親のほうが高く、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」では、保育園児の母親と10.1ポイントの開きがみられた。

育児への肯定的な感情については、否定的な感情ほどの差はなかったものの、保育園児の母親のほうが高い傾向がみられた。差のみられた順に、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」(5.2ポイント)、「子育てによって自分も成長していると感じること」(3.7ポイント)、「子どもを育てるのは楽しく

て幸せなことだと思うこと」(3.6ポイント)である。さらに、「よくある」という回答のみで比較すると、両者の違いはより明らかであり、「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」では7.5ポイント、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」では15.1ポイント、「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」では8.3ポイントの差がある。これらのことから、保育園児の母親のほうが、育児に対してより強い肯定感を持っていることが明らかとなった。

以上、3～5歳クラス児の子どもをもつ母親の子育て意識を、就園状況別に比較した結果、保育園児の母親のほうで、幼稚園児の母親より全体的に育児への感情の否定的な面では低く、肯定的な面で高いことがわかった。こうした背景には、保育園児のほうで保育時間が長いために、幼稚園児の母親よりも育児への物理的な負担が軽いことや、保育園児の母親は就業率が高く(図1-1-11、p.27参照)、母親自身が子育て以外の時間や生きがいを持てることで、精神的な面でも育児への負担が軽いことなどがあると考えられる。

■図2-6-3 子育て意識（3～5歳クラス児 就園状況別 05年）



注) 母親の回答のみ分析。

(サンプル数 幼稚園児681人、保育園児157人)